

研究だより No. 48

平成29年度 研究の概要

発刊にあたって	1
研究主題について	1～2
研究の内容	2～3
教科等の研究実践	4～8
総合学習シャトル 総合学習 CAN	9～11
研究文化の醸成	12
教育研究発表会のご案内	12

発刊 平成 30 年 2 月 14 日

香川大学教育学部附属坂出中学校

発刊にあたって



学校長 高木由美子

早春の候、皆様にはますますご清栄のこととお慶び申し上げます。

本校では、「『学ぶこと』と『生きること』をつなぐ『ものがたり』」というテーマについて、全教員一丸となって取り組んでいます。ものがたりとは、本校のナラティブ・アプローチの核であり、「語る」という行為そのものと、語られた「ものがたり」の両方を表しています。この、「ものがたり」のもつ力を活かした授業によって、生涯学び続けようとする強い学習意欲をもった生徒の育成を目指し、実践を続けてきました。また、平成28年度から取り組んでいる文部科学省の委託研究事業の集大成として、「ものがたり」の授業を広く実践してもらうための取り組み例について各教科で提案を行いました。

本年度はサブタイトルを「主体×主体の関係が生み出す深い学びをめざして」と掲げ、「深い学びを生み出す問いは適切であったか?」などの課題を各教科がそれぞれの切り口で掘り下げ、主体的な学び、対話的な学び、深い学びが具現化しているか、「応じる」ことができる生徒は育成されているなどを、実践を通じて検討しています。

また、「生徒が主体的に学ぶ」ためのもう一つの柱である、総合学習 CAN については、現状のカリキュラムに立脚した提案、生徒の実践について公開するとともに、次年度以降、シャトル学習の内容改善、カリキュラムの再構築などを行うことにより、さらに進化した「総合学習 CAN」を提案できるよう模索しているところです。

本号では、本年6月8日に開催予定の研究大会に向けて、研究テーマの概要や目指す学習論、実際の授業で実践と評価を可能とするための取り組み、支える環境・学校文化などに言及しながら、各教科・領域ごとの内容を掲載いたしました。ご一読の上、ご意見やご示唆を頂戴できれば幸いです。また、皆様には今後とも変わらぬご指導とご鞭撻を心よりお願い申し上げ、発刊のご挨拶とさせていただきます。

研究主題

「学ぶこと」と「生きること」をつなぐ「ものがたり」 —主体×主体の関係が生み出す深い学びをめざして—

1 研究主題について

「学ぶこと」は「生きること」

「生きること」は学び続けることである

学び続ける意欲を生むものが「ものがたり」である

「学ぶこと」は、新たな自分を生み出していくことである。「学ぶこと」は終わりのない旅、つまり自己を探し、学び続けることである。この学び続ける姿勢こそが、「生きること」そのものなのである。

人は、「学ぶこと」が自分の成長の糧になり、人生を豊かにするとわかれば、学び続けようとする。他者と語り合い、学び合う中で、学んだことを過去の経験と関係づけ、自分なりに意味を見いだしたり、価値を実感したりすることで、はじめて腑に落ちて心が動く。この心の動きが、学ぶ意欲を生み出すとともに、自分のよりよい生き方を見いだすことにつながっていく。これこそ、私たちが呼んでいる「ものがたり」なのである。

(1) 「主体×主体の関係」とは

自らの意志に基づいて

「人・もの・こと」にかかわろうとする学習者同士が、
対等な立場で、他者を受容しながら聞き合い、語り合う関係



【主体×主体の関係での学び】

(2) 「ものがたり」の授業における深い学びとは

教科等の本質を踏まえた学びと、
その過程で生まれる「ものがたり」の変容

昨年度から文部科学省より「教科等の本質的な学びを踏まえたアクティブ・ラーニングの視点からの学習・指導方法の改善のための実践研究」の委託を受けている。「ものがたり」の授業を行うことが、文部科学省の構想する「深い学び」¹も実現できると考えている。

2 今期の重点となる研究内容

今期は「主体×主体の関係」が生み出す深い学びをめざし、下記のことについて研究を行った。

(1) 深い学びを生み出すための問い

深い学びを生み出すための前提として、次の問い合わせが必要となる。

・全員を学びに引き込む問い合わせ

しかし、学びに引き込むだけで深い学びになるのだろうか。深い学びを生み出すためには、さらに次のような問い合わせが必要である。

・全員が対話に参加できる問い合わせ

・学びをさらに深めるための問い合わせ

全員を学びに引き込む問い合わせ

この問い合わせは、思考を促し、意欲を引き出す問い合わせである

学習者が、主体として参加しないと「ものがたり」が生み出されない。そこで、前提として「全員を学びに引き込む問い合わせ」が必要となる。この問い合わせをつくる上で、次のことを大切にしたい。

- ・「なぜ・・・？」のように学習のねらいや学習目標を直接問うのではなく、間接的に問うこと。
- ・間接的に問うためには「物、人、場所、数、色、音」など生徒が知覚体験をしている点について問い合わせをつくること。

間接的に問うことで、生徒は思考が促され、意欲的に考え始める。

¹ 習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「深い学び」が実現できているか（文部科学省「中学校学習指導要領解説総則編」、2017、77頁より）

全員が対話に参加できるための問い合わせ

この問い合わせは選択型であることが望ましい

深い学びを生み出すためには、全員が対話に参加できる問い合わせが必要である。全員が、主体として対話に参加してこそ、学びを深めることができる。生徒全員がいずれかの立場をとることができ、対話に参加できるためには「Aなのか？Bなのか？」のような選択肢を用意することが望ましい。しかし、問い合わせによっては、対話が行き詰まり、学びが深まらないこともある。

学びをさらに深めるための問い合わせ

学びをさらに深めるために、次のような問い合わせが考えられる。

① 論点をさらに焦点化する問い合わせ

② 第3の道を模索する問い合わせ

①の問い合わせは、「全員が対話に参加できているが、考えが拡散し、学びが深まっていないときに用いる」と有効な問い合わせである。②の問い合わせは、「対話の内容が堂々巡りになってしまい、学びが深まっていないときに用いる」と有効な問い合わせである。例えば、立場をこえて合意形成を図る問い合わせが考えられる。

(2) 聴き手を育てる教師のかかわり方

対話を深め、深い学びを生み出すために「応じる」ことができる生徒の育成が必要であると考えた。「応じる」を次のように定義している。

相手に意識を向けて、深く理解しようとする目的とした「反応」・「確認」・「問い合わせ」

具体的には、以下のことである。

反応	うなずきながら相手の話を聴いたり、わからない言葉や疑問に感じた点を素直に言葉にしたりすること
確認	相手の考えを自分の言葉におきかえて確認すること 例:「あなたが言いたかったのは、○○ってことなの」
問い合わせ	相手に意識を向け、相手の思いや考えについて問い合わせること 例:「どうしてそう考えたの」

相手に意識を向ける



【「応じる」を意識させるための掲示物】

- ・ 聴く力が高まる
- ・ 安心して発言できる空気が生まれる
- ・ みんなでわからうとする雰囲気が生まれる
- ・ 相手だけでなく、自分の考えも深まり、自分の世界が広がる

「応じる」ことにより、聴く力を高め、対話のベースをつくることができる。また「応じる」ことを踏まえて相手の意見を取り入れることが、前回大会でめざした、相手の意見や考えが、よりよくなるようにすることを目的とした「クリティカルに聴く、問う」ことにつながる。

聞き手は、語り手の意見を取り入れるほど、深い学びを生み出しやすくなる。「応じる」は、そのための手段である。



【相手に意識を向いている様子】

《国語科》

言語による認識の力をつける、豊かな言語文化を育む国語教室の創造 — ものがたりをつむぐ「語り直し」を生み出す指導・支援のあり方 —

言葉は、人と人との関係の中で生きる。言葉は、他者との語り合いの中でこそ、深く、豊かになる。ドリルのような反復学習や、正解をさがすような学習から習得されるのではなく、語り合う経験を通して「獲得」されるものである。

今期は、言葉を深く学び、自己のものとして獲得していく「ものがたり」が、どの生徒にも生まれるために「語り直し」について研究する。学んだことが学びの経験として自分の中に位置づくには、学びの過程で感じたり考えたりしたことを表出し、その思考の過程をメタ認知する必要がある。そのような「語り直し」について、教師のかかわり方も含めて、研究していく。

① 学びを充実させる単元構成や学習課題の研究

質の高い語り直しが生まれるために、前提としてその学びが充実していることが不可欠である。

② 互いの考えを磨き合う「語り合い」の追究

語り合いの中で、自分の考えに固執してしまっては、互いの意見を磨き合ったり、新たな認識が芽生えたりすることはない。それを乗り越えさせるための教師のかかわりを追究していく。

③ 質の高い「語り直し」のあり方

学んだことを羅列して書くのではなく、「何をどのように学んだのか、ストーリー性をもって物語る」ことが重要である。質の高い「語り直し」に必要な要素や観点・方法・タイミング等、さまざまな角度から探し、実践・検証していく。



大西 小百合



三浦 宏紀



【どのように学び、何を感じ、
考えたかを振り返っている様子】

《社会科》

これからの社会のあり方を自ら考える

民主社会の形成者の育成をめざした社会科学習のあり方

—「今・ここ¹」の相対化によって

再構成される「社会的自己」を通して—



山城 貴彦



大和田 俊



【他者と協働して、
こたえを模索する様子】

民主社会の形成者の育成という社会科の目標に到達するためには、「現代とは、どのような時代か」、「自分の住む地域には、どのような特徴があるか」等の「今・ここ」に生きる私を捉えられることが必要である。このような、「今・ここ」に生きる私を「社会的自己」と定義する。その「社会的自己」を捉え直す手がかりが、社会科で学ぶ社会的事象である。つまり、さまざまな社会的事象の学びによって獲得される社会認識を鏡として「今・ここ」を相対化することで、それまで漠然としていた「社会的自己」の捉え直しにつながると考える。

一方で、民主社会の形成者に求められる資質・能力も時代とともに変化している。人工知能の急速な発達に代表される現代社会の大きな変化の中で、今後突きつけられるのは、「人間とは何か」「国家とは何か」「豊かさとは何か」といった本質的な問いである。そういった本質的な問い合わせに対して、価値観や立場の異なる他者と協働して、こたえを模索し、つくりあげていく姿勢こそ、これからの民主社会の形成者に求められる資質・能力ではないだろうか。

以上のように考えて、研究主題を設定し、次の3点を目的として、研究を進めている。

- ① 「今・ここ」の相対化につながる社会認識を獲得すること
- ② 立場の異なる他者と協働して、こたえを模索する学びの場があること
- ③ 獲得した確かな社会認識を手段として、「社会的自己」が捉え直されること

¹ 本校社会科では、「今・ここ」とは、時間的、空間的、世間的視点から捉えた自己の生きている社会のことをさす。

《数学科》

数学化²のよさを実感できる生徒の育成

—「数学の本質に気づく問い」と

「振り返りの見とり」を通して—

数学科では、数学を学ぶことを通して自己形成につながる考え方や生き方を育むことを目指すために、「数学から学ぶことの価値」を実感させる学習課題について研究を進めてきた。その結果、疑問が多く生まれる学習課題や発展性のある学習課題が、対話が深まるのに適した課題であることがわかった。しかし、自分の生き方や考え方を数学から学んでいることに気づくまでには、生徒同士の対話から生まれた数学の本質に気づくいや深い振り返りが必要であった。

今期は、「数学の本質に気づく問い」と「振り返りの見とり」をどのように授業に取り入れていけば、より効果的に生徒が自己のものがたりをつむぐことができるのかについて追究し、数学化のよさを実感できる生徒の育成をめざすために、次の3点を中心に研究を行っていく。

- (1) 数学化のよさを実感するために適している授業展開の工夫
- (2) 「数学の本質に気づく問い」の工夫
- (3) 「振り返りの見とり」(振り返りシートの活用) の工夫

² 数学化…数学的な見方・考え方を働かせながら数量や図形及びそれらの関係などに着目し、観察や操作、実験などの活動を通して一般的に成り立ちそうな事柄を予想すること。(文部科学省)

《理科》

科学的に探究する資質・能力を育成し、深い学びを実感できる理科学習

—科学する共同体の中でつむがれる「ものがたり」を通して—

理科では、教科の本質を「自然の摂理や真実を解明する過程の中で、理科の見方や考え方を働かせ、科学的に探究するための資質・能力を育成すること」と捉えている。今期の研究では、これまでの研究を引き継ぎつつ、自然事象の中から見出した疑問や不思議について、主体×主体の関係の中で科学的に聞き合い、問い合わせ、語り合いながら探究できる集団(科学する共同体)のなかで、深い学びへとつながる「ものがたり」が生徒の中に生まれることをめざして、「単元構成と問い合わせ」や「対話の質」、「振り返り」を柱とした研究実践を行う。

— 理科における「ものがたり」とは —

探究の過程において、自己と様々な文脈とがすり合わされることで、自然事象を新たな見方や考え方で知的的、感性的に捉えなおすこと

— 深い学びの実感とは —

自己の学びを振り返る中で、教科の本質に対する深い理解と自然事象に対する見方や考え方の変容、新たな疑問や仮説などが生まれ、自分にとっての理科を学ぶ意味や価値に気づくこと



大西 光宏 渡辺 宏司 山田 真也



【新たな疑問を伝えている様子】



鷲邊 章宏 山下 慎平



【温度と反応速度の関係について仮説を立て、検証している様子】

《音楽科》

音楽のよさや美しさを味わい、音楽との関わりを深める学習のあり方
—音楽観の変容からつむがれる「ものがたり」を通して—

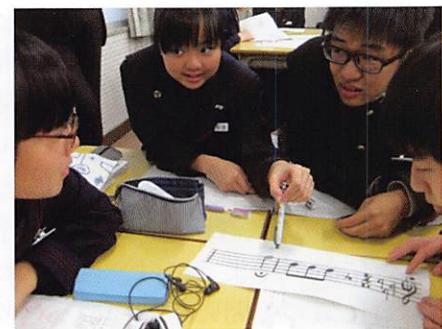


堀田 真央

多様な種類の楽曲に出会い、そのよさや美しさを味わう中で、自己の音楽観が更新される。これによって生涯にわたって音楽を親しむことにつながっていく。前回研究では、音楽観を更新するためのかかわりを生み出し、自己と音楽のかかわりについて語り直すための授業づくりのあり方について研究を進めてきた。

今期は、前回研究をふまえつつ、より主体的に楽曲にかかわらせ、他者との対話を通して生まれる新たな気づきをもとに、自己の音楽観を見つめ直させていく。生徒が、自己の音楽観を見つめ直す中で変容に気づき、その「ものがたり」を語ることで、音楽のよさや美しさを実感し、音楽との関わりを深めていく。このような生徒の姿を目指すために、以下の3点を手立てとし研究を進めている。

- (1)これまでの感じ方を見つめたり、新たな視点で教材曲を考えたりするための問いのあり方
 - ・改めて知覚し直すための問い ・「第三者」の視点で考えるための問い
- (2)お互いの思いや意図を共有し具体化するための工夫
 - ・音楽を形づくっている要素を視点として、楽譜や図などで意見を共有した上で対話
- (3)単元前後での知覚・感受などの比較をもとにした語り直しの工夫
 - ・O P Pシートを使用し、授業の中での知覚・感受を比較



【休符に気づき拍について対話する様子】

《美術科》

創造活動の喜びを見出す美術の学習
— 思いを語り聞くことで発想を広げ感じ方を深める —



田尾 亜貴

創造活動の喜びを見いださるために、これまで、互いの表現や思いを語り合い、自分らしい表現や味わい方につながる学習過程の工夫や支援の方法を研究してきた。しかし、自分らしい表現や味わい方ができる=どんな表現でも味わい方でもよい、という捉えになり、教科の本質に迫ることができない場面も見られた。

教科の本質を「感性を働かせながらよさや美しさを感じ取り、思考・判断し、表現する力を育て、豊かな情操を養うこと」と捉える。ただものをつくる、何となく作品を見るのではない。「感じ取り、思考・判断し、表現する」ために、自分の考えを語る場が大切になる。色や形、イメージなどの視点をもって語りながら創造活動を行なうことで、自分と美術との関わりに気づくことができる。しかし聴き手がその語りを、関心をもってき聽かなければ、発想を広げ、感じ方を深めることにはならない。聴き手は、「どうしてそう思ったのか。」「どこを見てそう感じるのか。」など、語り手の表現や味わい方がさらに深まるように、関心をもって聴かなくてはならない。

以上のように考え、次のことに取り組んでいる。

- (1)自分と美術との関わりに気づく単元構成の工夫
- (2)語り、聞くを通して自分らしい表現や感じ方を深める場の設定
- (3)美術の「ものがたり」をつむぐための学習記録の活用



【作品を比較し相違点を見つける】

《保健体育科》

運動・スポーツの面白さに浸り、

豊かなスポーツライフの実現へつなぐ保健体育学習

－ 運動・スポーツの本質を問い合わせ続ける共同体づくり －



三宅 健司 石川 敦子

保健体育科では、「対話」や「語り合う」場面を設定し、その中から学びの意味や価値を実感できる保健体育学習を実践してきた。特に、運動の苦手な生徒が、できる喜びや体を動かす喜び、わかる喜び、競う喜び等を実感できる授業をめざし、実践してきた。教材や班編制のしかた等を工夫することで、生徒が自ら「価値ある答え」を探求し、その中で生徒の内面にどのような変化が見られ、学びや新しい気づきが生まれたのかについて研究を進めてきた。



【仲間と動きを確認する様子】

今期は、「生徒が『ものがたり』をつむぎやすい単元構成」や「生徒が切実感をもつような学習課題や問い合わせ」という前期の反省から単元構成を含めた教師のかかわり方、特に学習課題や教材の工夫、振り返りの場面の設定と工夫等を通して、生徒同士が教え合い、学び合いながら主体的に取り組むような授業を、生徒とともに創りたいと考えている。教師が、生徒のつまづきや実態を活動やノートなどから見とり、生徒にとって切実感のある課題や挑戦したいと思う課題に対し、共同体とともに問い合わせ続けることで、豊かなスポーツライフの実現ができる生徒の育成をめざした保健体育学習のあり方について研究を進めたい。以下の視点で研究を行っていく。

- (1) 個の文脈から運動・スポーツの面白さに浸る単元構成と学習課題の工夫
- (2) かかわり合う中で学びの意味や価値を実感していく共同体づくり
- (3) 「ものがたり」を実感するための振り返り場面の設定や工夫と教師のかかわり方

《技術・家庭科》

よりよい生活を未来へつなぐ実践力を育む技術・家庭科教育

－ 実生活を見つめ、聴き合い、語り合うことで生まれる

「新たな『ものがたり』」を通して－



池下 香 渡邊 広規

技術・家庭科では「振り返り—意味化—生活化」の授業に取り組んできた。前回大会から「新たな『ものがたり』」という視点を入れ、よりよい生活をめざす意欲・態度を高めることをめざしている。その結果、語り直しの中に「実行したい」という意欲面の記述が多数見られたが、それを個の実生活の中で実践できたのかを明確に分析できていないという課題が残った。



【もの(実物)に触ることで実感したことと語り合い、自分の生活へつなぐ】

技術・家庭科における生徒は学習者であると共に、生活の主人公(主体)である。「生活に始まり、生活に返る」学びを根底とし、自己の学びをよりよい生活に向けた実践力へつなぐことができる生徒を育成するため、今期の研究では、これまでの研究をふまえ、以下の視点で研究を行っていく。

- (1) 多様な生活の価値観をもつ個の文脈を分析し、実践力へつながる単元構成と問い合わせ
- (2) 生活者として、主体×主体の関係で聴き合い、語り合うための場の設定と教師のかかわり方
- (3) 未来の生活への実践力に変容するための語り直しの工夫

このような実践により、ひとりの自立した生活者になるための実践力を育み、生徒の自己形成へつなげていきたいと考える。

《外国語科》

コミュニケーションへの意欲を高める英語授業の創造 — 主体的な言語活動から生まれる「ものがたり」を通して —

グローバル化やITの発展といった今日の現状から、本校では積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成に重点をおいて研究を行ってきた。また、ことばの奥深さや多様性を実感するなど、言語や文化に対する理解を深めて、コミュニケーションへの意欲につなげる実践も行ってきた。

今期も、以下の3点を研究の柱とし、コミュニケーションへの意欲を高めるために生徒が主体となって自分の意見や考えなどを積極的に伝え合う言語活動を単元に組み込んでいきたいと考えている。

(1) コミュニケーションに対する意欲を高める学習課題の工夫

学習課題を教師が与えるのではなく、生徒が興味をもち、他者と一緒に考えたいと思った課題を取り上げ、学習に対する動機を高めさせる。

(2) 個や集団が主体となるための教師の支援のあり方

生徒の対話が深まるように、対話の場面を3段階に分けて設定する。(①モデルと自分の英語表現を比較②自分と他者の英語表現との比較③全体での比較)また、対話の場面でホワイトボードを用いて対話の内容の可視化を行うことで、話のポイントに意識を集中させる。

(3) 英語に対する新たな「ものがたり」が生まれる語り直しの工夫

グループで授業を通して発見したことや疑問に思うこと、英語や英語表現に対する新たな気づきを付箋に書かせ、ホワイトボードや模造紙などに貼らせることで、その時間の学びを語り直させる。

《学校保健》

生涯にわたる健康で健全なライフスタイルの確立をめざして — 中学生における自尊感情を高める健康相談のあり方 —



日本 亜矢

生涯にわたる健康で健全なライフスタイルを確立させるために、前回大会では危険行動を抑止し、自分や他者を大切にしようとする心の予防的な取り組みが必要と考え、健全な自尊感情を育み、同時に自己信頼心（自律）の育成を目指した予防教育プログラム（TOPSELF—いのちと友情の学校予防教育—）を健康教育の一環として取り入れ集団教育を実施してきた。

今年度の生徒実態より、保健室頻回来室の人間関係トラブルや集団生活への不適応が見られ、個への支援の必要性を感じた。生徒は、学校で唯一評価をしない養護教諭に保健室という独自の空間で、様々な思いや表情を見せる。

そこで、保健室で日常的に行われる健康相談をナラティブ・アプローチで試み、生徒の言葉から課題解決をさぐり、健康相談後の自尊感情の高まりや生活がどのように変化したかを検証する。また、健康相談を言語化し、生徒自身が振り返れるようにしたいと考える。さらに、記録を基にスクールカウンセラー（専門家）が評価し、養護教諭による健康相談の資質・能力の向上も目指す。



【対話を通じて新たな気付きが生まれる】



日本 亜矢



【健康相談の様子】

総合学習シャトル

MAO 哲学合議

1 平成 29 年度（5月～6月）の実践

総合学習シャトル(以下シャトル)のねらいは、教科学習における活用と総合学習 CAN (以下 CAN) における探究とをつなぐことにある。

CAN の探究とて有効な探究スキルを身に付けさせるために、「実験」「創造」「調査」の 3 分野における探究スキルをふまえながら内容改善を図った。(図 1) また、前回研究の課題であった、自分たちの考えを表現する場面をより重視して、基礎的な表現力が身に付けられるよう実践を行った。

分野	講座名	学ぶ主な探究スキル	講座内容
実験	変数の扉	着眼する 条件制御する 関連づける 批判的に見る・考える 比較する 関係を見いだす 批判的に考える 伝達する・説得する	探究活動において必要とされる変数への着目の仕方や変数制御の方法を習得し、自ら実験を計画できる力を身につけていく。最近身体を使った探究を行うクラスターが増えている。クラスターの探究がより深いものになるように、今年度は、「垂直跳びの高さは何に関係しているのか」を課題とした。その課題を解決する過程で、変数を見いだしたり、データを批判的に見たり、複数回とることの重要性についてふれたりすることで、「CAN」で活用できる探究スキルの向上を計りたい。
創造	みんなで 匠に なろう	調査する・着眼する 比較する 分析・調査する 質問する 説得する 批判的に考える 表現する	コンセプトをもとに素材や形などについて考え、スケッチングをして具体化していくスキルを身につけていく。ここで学んだスキルは CAN でも、自分がつくりたいものを考える際に活用できる。1つの物をつくるにはどれだけ多くのことを考え、確認した上でつくるなければいけないかなど、見通しをもつ力や着眼する力を育てる。また、相手の設計図や試作品を分析し、コンセプトに立ち戻って自分のものを見直すことで、比較する力、分析する力、批判的に考える力も養う。
調査	徹底調査！ 附坂中生の 実態とは？	着眼する 発想をする 比較する・関連づける 批判的に考える 評価する 伝達する・説得する	本講座は、本校生徒の傾向（実態）について実際に調査活動を行い、その調査データを根拠にして本校生徒の傾向（実態）を結論づけることを通じて、調査の基本的なスキルを身につけることを目的とする。生徒の傾向（実態）を調査によって明らかにするためには、調査データの数量だけでなく、その質（質問内容）に着目する必要がある。互いに行なった調査データの質を批判的に検証する活動を通して、その重要性に気付き、CAN で活用できる調査の探究スキル向上をはかりたい。

図 1 平成 29 年度実施の 3 講座

一般講座終了後は、特設講座として、5群、15講座のスキルから生徒が 2 つのスキルを選択し、自分に必要なスキルの補充を行った。今年度からは受講カードを作成し、これまで身についたスキルを確認できるようにした。

平成 29 年度実践後の結果は、図 2 の通りである。

生徒へのアンケート

はい 4— 3— 2— 1いいえ

【特設講座 情報の読み方】

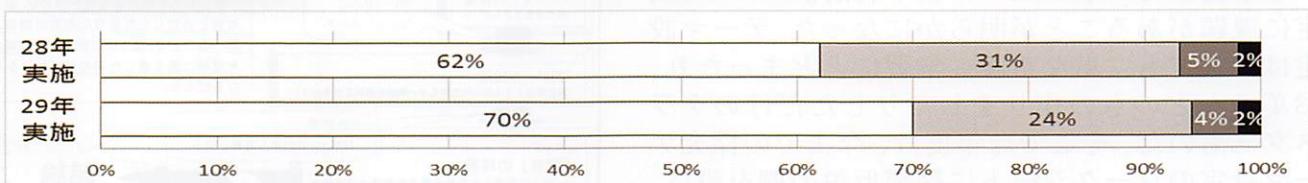


図 2 シャトルを通して、CAN につながるスキルが身につきましたか？

昨年度より「4」と答える生徒が増加し、シャトルが CAN につながる探究スキルを学べる場として定着していると言える。本年度は、一般講座の終了時に探究スキルが身に付いているかどうかをはかるための「スキル定着テスト」を各講座で行った。各講座で検証した結果、どの講座においても定着しているという結果となった。一方で、今回のシャトルで表現力の向上に取り組んだものの、具体的な表現力のスキルが明確になっていなかったことが課題となった。

2 平成 30 年度の構想

シャトルが探究スキルを学ぶ場として定着しているが、CAN の探究がさらに充実できるよう講座内容の改善は継続していく。一般講座の授業時間を増やしてほしいという生徒がどの講座においてもおり、時間配分について考えていく必要がある。また、聴いている人に探究内容が分かりやすく伝わる技法をシャトルの中で取り入れながら、生徒の表現力が高められるようにしていく。

総合学習 CAN

1 平成 29 年 1 月～11 月の実践

CAN とは、Cluster (クラスター)、Action Learning (アクション・ラーニング)、Narrative Approach (ナラティヴ・アプローチ) の頭文字をとったものである。

【平成29年度 活動時期と概要】

学年	総合学習シャトル・CAN				
	冬休み・1月・2月	3月・4月・5月	6月	7月・8月・9月	10月・11月
	1人CAN (個人で探究 テーマを設定)	2人CAN→3人CAN (探究テーマ深化・ク ラスター編成)	3人CAN (探究スキル習得・ 活用)	3人CAN (探究活動・外部発信)	3人CAN→1人CAN (発表・発信・振り返 り)
新3年生	マインドマップ・探 究テーマの再設定 3年生から探 究のアドバイス	第1次クラス ターアドバイス 探究テーマの再設定・探 究方法の練り直し 新入生へのプレゼン準備	第2次クラス ターアドバイス 探究テーマ完成・探 究テーマ深化・探 究方法の練り直し 新入生へのプレゼン準備	☆☆体験 シシャマト ル特設講座 「CANの日I」 探究テーマや探究の方向性・探究方法等について専門家（大学教授や企業等）にアドバイスをもらいたい場合 行葉等へアドバイスをもらいたい場合 に必要なスキルを習得・活用させ、探究シミュレーションをするために半日かけて活動する。 「CANの日II」 探究テーマや課題について、専門家（大学教授や企業等）にアドバイスをもらいたい場合 行葉等へアドバイスをもらいたい場合 に必要なスキルを習得・活用させ、探究シミュレーションをするために半日かけて活動する。 各クラスターでの探究内容の成果や課題について、質問を中心にして明確にしていく。 「A」会議 「CANの日II」 探究の成績や課題について、質問を中心にして明確にしていく。 「CANの日II」 探究の成績や課題について、質問を中心にして明確にしていく。 各クラスターでの探究内容の成果や課題について、質問を中心にして明確にしていく。 「A」会議 「CANの日II」 探究の成績や課題について、質問を中心にして明確にしていく。 「CANの日II」 探究の成績や課題について、質問を中心にして明確にしていく。 各クラスターでの探究内容の成果や課題について、質問を中心にして明確にしていく。 「A」会議 「CANの日II」 探究の成績や課題について、質問を中心にして明確にしていく。 「CANの日II」 探究の成績や課題について、質問を中心にして明確にしていく。 各クラスターでの探究内容の成果や課題について、質問を中心にして明確にしていく。 「A」会議 「CANの日II」 探究の成績や課題について、質問を中心にして明確にしていく。 「CANの日II」 探究の成績や課題について、質問を中心にして明確にしていく。 各クラスターでの探究内容の成果や課題について、質問を中心にして明確にしていく。 「A」会議 「CANの日II」 探究の成績や課題について、質問を中心にして明確にしていく。 「CANの日II」 探究の成績や課題について、質問を中心にして明確にしていく。 各クラスターでの探究内容の成果や課題について、質問を中心にして明確にしていく。 「A」会議 「CANの日II」 探究の成績や課題について、質問を中心にして明確にしていく。 「CANの日II」 探究の成績や課題について、質問を中心にして明確にしていく。 各クラスターでの探究内容の成果や課題について、質問を中心にして明確にしていく。 「A」会議 「CANの日II」 探究の成績や課題について、質問を中心にして明確にしていく。 「CANの日II」 探究の成績や課題について、質問を中心にして明確にしていく。 各クラスターでの探究内容の成果や課題について、質問を中心にして明確にしていく。 「A」会議 「CANの日II」 探究の成績や課題について、質問を中心にして明確にしていく。 「CANの日II」 探究の成績や課題について、質問を中心にして明確にしていく。 各クラスターでの探究内容の成果や課題について、質問を中心にして明確にしていく。 「A」会議 「CANの日II」 探究の成績や課題について、質問を中心にして明確にしていく。 「CANの日II」 探究の成績や課題について、質問を中心にして明確にしていく。 各クラスターでの探究内容の成果や課題について、質問を中心にして明確にしていく。 「A」会議 「CANの日II」 探究の成績や課題について、質問を中心にして明確にしていく。 「CANの日II」 探究の成績や課題について、質問を中心にして明確にしていく。 各クラスターでの探究内容の成果や課題について、質問を中心にして明確にしていく。 「A」会議 「CANの日II」 探究の成績や課題について、質問を中心にして明確にしていく。 「CANの日II」 探究の成績や課題について、質問を中心にして明確にしていく。 各クラスターでの探究内容の成果や課題について、質問を中心にして明確にしていく。 「A」会議 「CANの日II」 探究の成績や課題について、質問を中心にして明確にしていく。 「CANの日II」 探究の成績や課題について、質問を中心にして明確にしていく。 各クラスターでの探究内容の成果や課題について、質問を中心にして明確にしていく。 「A」会議 「CANの日II」 探究の成績や課題について、質問を中心にして明確にしていく。 「CANの日II」 探究の成績や課題について、質問を中心にして明確にしていく。 各クラスターでの探究内容の成果や課題について、質問を中心にして明確にしていく。 「A」会議 「CANの日II」 探究の成績や課題について、質問を中心にして明確にしていく。 「CANの日II」 探究の成績や課題について、質問を中心にして明確にWEBPACK	
新2年生					
新入生					

2 平成 29 年度の新たな実践

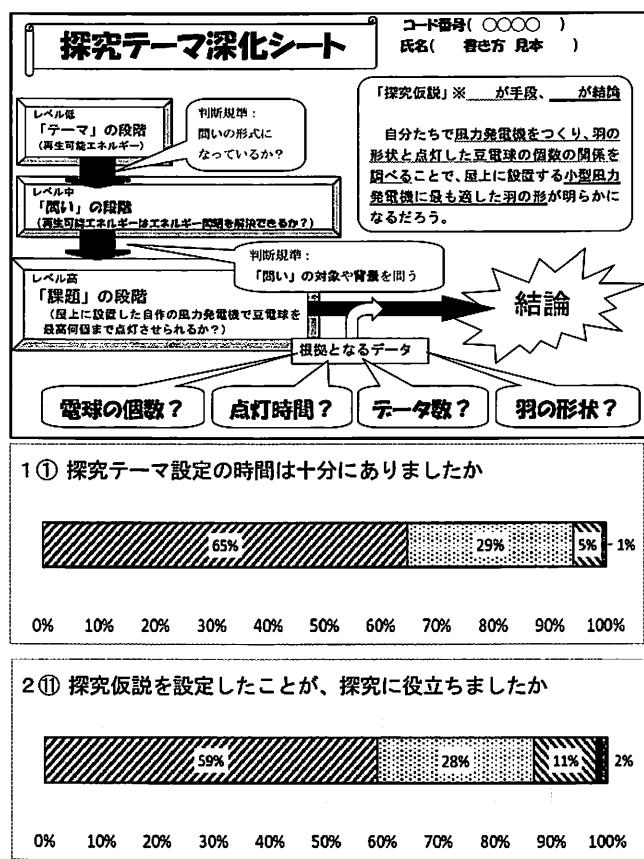
(1) 探究テーマ深化シート

昨年度までの取り組みにより、探究テーマの設定に課題があることが明らかになった。テーマ設定はできても、単なる調べ学習にとどまったり、お菓子などのもの作りをしたりしただけのクラスターもいた。そこで今年度は、今までの探究テーマ設定のワークシートに探究仮説の欄を設け、探究サイクルの方向付けができるようにした。右図が探究テーマ深化シートである。

その結果、「探究仮説を立てたことによって、自分たちがめざしているものについてよく考えられた。」「探究のやり方やどんな実験をしたらいいかが分かった。」などの意見が聞かれた。探究テーマの設定に従来よりも時間を要したが、多くのクラスターが自分たちの立てた探究仮説をもとに、熱心に探究活動に取り組めるようになった。

(2) CAN の日 I ・ II (2 回実施)

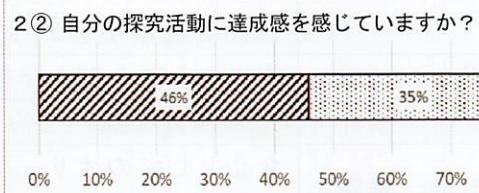
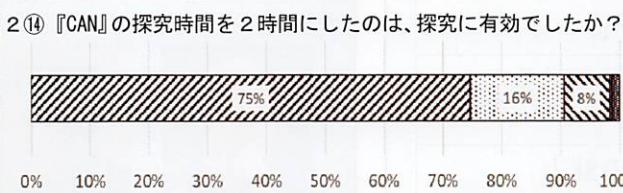
昨年度までは、夏季休業開け(8月末)に1日かけて行っていた「CAN の日」を、今年度は半天の活動で2回に分けて行うこととした。その意図は、2点ある。1点目は、探究の早い段階で、専



門家へのアドバイスをもらいに行かせる機会を設けるということである。探究テーマの多様化に伴い、本校職員では、対応しきれないテーマも多くなってきた。そこで、探究をスタートするに当たり、大学教授や各種専門家への研究の相談に行きやすくした。2点目は、「CAN の日」での失敗やつまずきを修正する機会を設けることである。CAN での探究は、失敗しても問題は無いが、修正する機会がないまま CAN でのまとめに入していくクラスターが今まで少なくなかった。そこで、「CAN の日」を夏季休業の前後の2回に分けることで、生徒たちが納得のできる探究活動ができるのではないかと考え、CAN の日 I・II を設定した。

(3) 2時間編成の CAN の時間

「探究の時間が足りない」、「時間に追われて、途中で実験が終わってしまった」といった生徒の意見を受けて、昨年度まで1時間編成だった探究活動の時間を2時間編成にした。生徒からは、「十分な探究ができる」、教師からも「2時間継続なので、生徒に十分かかわれる」といった意見が聞かれた。しかし、探究テーマや探究仮説が不十分な状態で活動に取り組んでいるクラスターは、時間をもてあましている現状もあり、何らかの手立てが必要であると感じた。



3 平成 30 年度 (CAN2018) への構想

今年度は、より探究が深められるよう、探究仮説の設定や探究活動の時間の確保、探究の流れが一目でわかる発表用ボードなど、様々な改良を加えてきた。しかし、依然として探究テーマの設定や探究仮説、探究計画の段階でつまずいたまま、活動を行うクラスターも少なくない。第9回目を迎える CAN2018 では、探究テーマや探究仮説を設定する時間の確保に努めるとともに、教師側のかかわり方についても十分に検討を重ね、CAN にかかる人々が達成感や満足感を味わえるように努めていきたい。また、そうすることで、自分たちの探究を外部に発信するクラスターも増えていくのではないかと考える。今後も学校の研究文化を象徴する「最高の学びの場」として、ますます進化させていきたい。

<最優秀研究 「青雲賞」 受賞者へのインタビューから> 研究テーマ 「オリーブ〇〇の研究PART II～おいしくて栄養のある オリーブ〇〇は作れるのか～」



【青雲の碑の前で受賞後の記念撮影】

Q なぜ、今回のテーマにしたのですか？

A 去年から継続研究としてつづけていて、今年のテーマは去年の研究テーマに付け加え、今年の研究内容を盛り込んだものとなっています。

Q 研究はどのようにして進めていきましたか？

A 普通の野菜との違いがわかるように、実験の内容を考えました。夏休みまでに植物の栽培をして、夏休み後は CAN の日を活用して栽培した野菜の成分などを検査しました。また、研究を分かりやすくまとめるにも取り組みました。

研究文化の醸成

1 大学出前授業

香川大学の各学部の先生を講師としてお招きし、生涯学習、キャリア教育の一環として実施している。本物の研究者から、CANへのヒントをいただく機会となることも期待している。

学部	講師	内容
教育学部	佐々木信行	温泉と私の研究
法学部	金子 太郎	政治・経済、国際政治、何でも聞いてみよう
経済学部	山本 裕	大学でも歴史勉強するの!?経済学部なのに!? ～社会経済史というアプローチ～
医学部	谷本 公重	疾患をもちながら学校生活を送ること
工学部	中西 俊介	光の性質を調べてみよう
農学部	小川 雅廣	食品としてのオリーブ葉の魅力 ～特に、葉のポリフェノールについて～

2 親子セミナー

前期は鹿谷明生先生（デフバレーボール男子日本代表監督）より「ブレークスルーが合言葉」という演題で、後期は長尾健司先生（香川県立高松商業高校）より「野球を通しての『ものがたり』」という演題で、これから生き方や考え方についてご示唆をいただいた。



教育研究発表会のご案内(第1次案内)



副校長 小林 理昭

この度、下記の日程で、平成30年度教育研究発表会を開催するはこびとなりました。つきましては、是非ご参会いただき、ご指導・ご助言を賜りたくご案内申し上げます。

1 テーマ 「学ぶこと」と「生きること」をつなぐ「ものがたり」
—主体×主体の関係が生み出す深い学びをめざして—

2 日 時 平成30年6月8日(金) 8:50~16:35

3 内 容 ○ 全体提案
○ 公開授業
○ 教科、学校保健提案・授業討議
○ 講演 上智大学総合人間科学部教育学科 教授 奈須 正裕 先生

編集委員

山城 貴彦 大和田 俊
鷺辺 章宏 渡辺 宏司
山田 真也 石川 敦子
堀田 真央 山下 慎平

平成30年2月14日

編集 香川大学教育学部附属坂出中学校
〒762-0037 坂出市青葉町1番7号
TEL/0877-46-2695 FAX/0877-46-4428
<http://www.sch.ed.kagawa-u.ac.jp/>
E-mail sakachu@ed.kagawa-u.ac.jp